

研究ノート

創造か進化かー

岡本亮輔『創造論者 vs. 無神論者：宗教と科学の百年戦争』
を題材に*

木村光彦**

I. 序

素朴な進化論は古代ギリシアの哲学者にみられるが、「科学的」進化論は事実上、ダーウィン『種の起原（起源）』（1859 年）に始まる¹⁾。進化論にたいしてキリスト教会は、聖書の天地創造の記述にもとづき、反発してきた²⁾。流れが大きく変わったのは近年である。1996 年、カトリック教会は、進化論は仮説以上のものである、しかし神が魂を創造し、進化を導いたとして、進化論を受容した³⁾。これは一般に有神論的進化論と呼ばれる。

* 本小論は当初、書評を意図していたが、作成中、私自身の見解が次第に前面に出てきたので、改稿、改題のうえ研究ノートに変更した。この間、次の方々から大変有益なコメント、教示をいただいた：猪木武徳（元青山学院大学特任教授、大阪大学名誉教授）、西村一宏、吉田真木、木村陽子（福島学院大学特任教授）。各位に謝意を表する。

** 青山学院大学名誉教授

- 1) 『種の起原』の原題は、*On the Origin of Species by Means of Natural Selection, or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life* である。進化論の系譜は、八杉龍一『進化論の歴史』岩波書店、1969 年を参照。
- 2) 対立の背後の事実として、『種の起原』発表当時、ダーウィンが神を信じていたこと、彼の進化論に賛意を示す教会、聖職者もみられたことは記憶されてよいだろう。
- 3) John Paul II, “Truth Cannot Contradict Truth,” Address to the Pontifical Academy of Sciences, *Origins* (Washington: CNS Documentary Service), vol. 26, no.22, Nov. 14, 1996（この文献は猪木武徳教授の教示による）。これ以前、カトリック教会は進化論をひとつの仮説としては認めていた（ピウス 12 世、1950 年）。これらの点の解説として、*The Pope and Evolution - Christendom Media*（ウェブのサイト）を参照。

プロテスタント教会では、教派あるいは信者個人によって考えが異なる。聖書を比喩的、象徴的に解する自由主義的教派はカトリックと同様、進化論を認める。一方、保守的とくに福音主義的な教派、いわゆる福音派は、聖書を字義通りに解する立場から進化論を誤りとし、創造論を支持する。福音派は、日本のプロテスタント教会では少数だが、米国では大きな勢力を占める⁴⁾。

2023年9月、一般向けの書物、『創造論者 vs. 無神論者：宗教と科学の百年戦争』（講談社）が刊行された（以下、『創造論者 vs. 無神論者』）。著者は岡本亮輔氏（1979年生）、宗教学と観光学を専門とする北海道大学大学院教授で、これまでに、聖地巡礼ツーリズムや宗教と日本人をめぐる多数の書物を著している。

この書物についてはすでに、いくつかの短評や紹介が出ている。そのなかで、科学史家の村上陽一郎氏は、「中々面白い本である……〔第2章の〕描写は細密を極め……その筆致には感服する」と賞賛している⁵⁾。アマゾンでも、2024年11月現在、26件のコメントが寄せられ、評価値4.2（最高は5）と好評である。

私も同書を興味深く読み、多くを教えられた。私の専門は経済学で、宗教学や生物学・考古学とは無縁だが、キリスト信者として創造・進化論争に関心を寄せてきた。本小論では同書を題材に、創造論、進化論について私の考えを述べたい。

以下、第II節で同書の内容を概観する。第III節では、この論争をめぐる著者、岡本氏の立場、続いて私自身の立場を説明する。さらに、同書で岡本氏が重点的に取り上げる「新無神論者」の人物像を探る。第IV節では学校での進化論教育と道徳教育について卑見を記す。

4) 日本のマスコミや論壇を見渡すと、福音派の印象はよいとはいえない。イスラム過激派と対をなす狂信的・排他的なキリスト教原理主義者で、共和党保守強硬派とくにトランプ氏の支持基盤というレッテルが貼られている。しかし福音派は元来、（米国の宗教集団、アーミッシュのように）平和・博愛主義的である。優れて知的な信徒も少なくない。上記の見方は一面的に過ぎる。近年の米国福音派の動向は以下を参照：堀内一史『アメリカの十字架—信仰をめぐる市民社会の断層線』明石書店、2024年。

5) 村上陽一郎、*All Reviews*、2023年12月12日。

II. 『創造論者 vs. 無神論者』の内容

欧米では近年、キリスト教—伝統宗教—離れが進んでいる。これは教会（出席者）数の減少や住民の意識調査から明らかである。第1章は、パロディ宗教の登場に焦点を当て、この現象を考察する。パロディ宗教とは、サッカーの有名選手、宇宙人、想像のモンスターなどを神扱いするものである。著者、岡本氏はこれを伝統宗教への反逆と捉え、そこでは、そもそも宗教とは何かが問題となると指摘する。

第2章では、いわゆる猿裁判（Monkey trial）—スコープス（Scopes）裁判とも呼ばれる—を取り上げる。この裁判が行われたのは1925年で、被告は米国テネシー州デイトンの公立高校教師、スコープス、告発理由は進化論教育を禁じた州法違反である。

猿裁判は創造・進化論争史上、有名で、関連する書物は必ずといってよいほどこれに言及する。岡本氏は同裁判を詳細に跡づける。叙述は、検察側の一員ブライアン（3度も大統領候補になった著名人）と弁護士ダロウの論争を中心に物語風に進行する⁶⁾。

第3章の題材は、2005年、カンザス州都トピカでの進化論公聴会である。岡本氏はまずその概要を紹介し、つづいて創造論の新たな武器—創造科学とID論—を解説する。創造科学とは、古生物学、地質学、天文学などの現代科学を援用して創造論を主張するものである。ID（Intelligent design）論は、神概念を封じて、世界の起源に別途、知的存在を想定する—ただしその存在を具体的には示さない。

トピカの公聴会には23名の創造科学・ID論者が証人として参加した。多くは理系の大学教授で、ミネソタ大学など名だたる大学で医学や化学の博士号を取得している（116－17頁）。進化論者を代表して参加したのは弁護士1名のみだった。岡本氏は彼を主人公に叙述を展開し、「[この弁護士]の奮闘で、創造論者のカンザス州への侵略は食い止められたのである」と述べる（136頁）。

6) 裁判の結果は有罪（100ドルの罰金刑）だったが、のち上級審の州最高裁はこれを無効とした。

第4章は「四人の騎士―反撃の新無神論者」と題する。テーマは新たな無神論運動である。主役は無神論を説く学者4名、くわえて信仰者として、ブレア元英首相、マハトマ・ガンディ（ガンジー）、キング牧師、マザー・テレサが登場する。新無神論者によるこれら信仰者とくにマザー・テレサにたいする非難は、一篇の面白い読み物である。

岡本氏がここでもっとも多くのページを割くのは、オックスフォード大学の生物・動物行動学者、リチャード・ドーキンズである⁷⁾。彼は「世界一有名な科学者の一人」といわれ、とくに著書、『利己的な遺伝子』、『神は妄想である―宗教との決別』で知られる。

ドーキンズは非常に戦闘的で、宗教はすべて迷信にすぎず、有害無益だと論断する。彼によれば、科学こそ正しく、信頼できる。人間とは何かといった深遠な問題を解き明かすのは唯一、進化論である。

第5章の前半は前章に続きドーキンズが主役を演じる⁸⁾。ドーキンズは2012年、オーストラリアの公共放送で、カトリック枢機卿ペルと公開討論を行った。その場でペルは、伝統的な神学の立場から「科学は、『なぜ私たちが存在するのか』を説明できていないと嘯みつく」（196頁）。ドーキンズはこれに「丁寧に応じ・・・科学は宇宙や生命が誕生したメカニズムを明らかにし、その意味での『なぜ』は解明されつつある」と述べた。岡本氏によれば、最後にはドーキンズがこの討論でペルに圧勝したという（どのようにかは書かれていない）。

ドーキンズの次の相手として、岡本氏が言及するのはマクグラスである。マクグラスは聖公会所属の神学者で、有神論的進化論の立場に立つ。オックスフォード大学で分子生物学を専攻し、のちに神学に転じた。精力的な学究・啓蒙

7) 日本ではどの文献もドーキンズと書くが、本人が自己紹介でドーキンズ [z] と発音しているので、本小論ではドーキンズとする（Richard Dawkins, Wikipedia, 2025年1月5日閲覧）。

8) 第5章のタイトルは「すべてがFになる」である。これが何を意味するのか、同書には説明がない。どうやらベストセラー推理小説のタイトル（Fは一種の暗号）らしいが、この章の内容とどう関連するのか、私には分らない。

活動により、彼の名は世界で広く知られるようになった。著作は日本のキリスト教界でも広く読まれている。

興味深いことにマクグラスは当初ドーキンズの熱心なファンで、『利己的な遺伝子』を素晴らしい読み物と絶賛したという（204 頁）。しかしドーキンズが反宗教的態度をつよめると、彼への批判者となった。

両者はディベートを行い、これは長編ドキュメンタリーとして映像化された（2006 年にはテレビで放映）。岡本氏は、このディベートを「恐ろしくつまらない」と評する（210 頁）。理由は単純で、それぞれが自分の主張を相手にぶつけるだけで、議論がまったくかみ合わないからである。

第 5 章の後半にはさらに幾人もの論者が登場する。その一人はコリンズである。彼は遺伝学の世界的権威で、米国ヒトゲノム解読計画の責任を担う人物だった。少年時代、キリスト教への関心は薄かったが、医学部に入学してから徐々に変わり、回心した。きっかけは C. S. ルイス（童話『ナルニア国物語』で知られる）の古典的信仰書、『キリスト教の精髓』を読んだことにあるという。

コリンズもまた、科学と宗教は矛盾しないとの信条の持ち主である⁹⁾。このコリンズにたいして、新無神論四騎士が「手を焼いた」と岡本氏は述べる（225 頁）。何しろ、社会的に大きな影響力をもつ第 1 級の科学者が、「自然の法則とは別の超自然の法則があると確信しているのだから、納得させようがない」（同頁）。

コリンズは立場を超えて、四騎士の一人、ヒッチنزと親交を結んだ。末期ガンに苦しむヒッチنزにゲノム治療を勧めたのは、コリンズだった。岡本氏は、こうした人間味あふれるエピソードで第 5 章を閉じる。

終章の主題は宗教と科学の関係である。それはどうあるべきか、将来の展望はどうか。岡本氏はこれについて主に、古生物学者の S. J. グールド『神と科学は共存できるか』と物理学者の I. G. バーバー『科学が宗教と出会うと

9) くわしくは、F. コリンズ、中村昇・中村佐知訳『DNA に刻まれた神の言語 遺伝学者が神を信じる理由』いのちのことば社、2022 年を参照。

き一四つのモデル』をもとに論じる。

これを要約すれば、科学の絶対的優位性である。科学は過去、その「教導権」を広げてきた（「教導権」はグールドによる造語で、一見難解だが、要するに「縄張り」の意味である）。先進国では宗教離れと相まって、この傾向はますます強まるだろう。地球規模では、イスラム世界の人口増加率が高いことから、宗教信者が相対的に多くなると予想される。そこでも宗教離れが起こるのか。無神論と宗教の戦いがいかに進展するのか。それは予測困難だが、将来の宗教と科学の戦線は現在とは大きく異なるものになる、と岡本氏は締めくくっている。

III. 創造論か進化論か

（１）岡本氏の立場

岡本氏はこの自著で、創造と進化にかんする自らの立場を明らかにしていない。叙述には、さまざまな論者の主張と岡本氏の見解が混在する。両者を識別しながら読みすすめると、次第に氏の立場が分かってくる。

第3章で、「創造科学もID論も創造論者がでっち上げた疑似科学である」と岡本氏を書くとき、文脈から、これは氏の見解と考えてよさそうである（100頁）¹⁰⁾。他方、「膨大なエビデンスが進化論を支持している」という文は、すぐ後に「主流派の科学者にとって、突然変異と自然淘汰が生物の変化を導いてきたという進化論のアイディアに疑問の余地はない」と続くので、氏の見解なのか判然としない（104頁）。次々節は「主流派科学者はID論者と論争してはいけない」で始まる（同）。これは氏の見解のようである。

いずれにせよ、岡本氏が創造論に否定的、いやそれにもまして敵対的であることは、序章から伝わってくる：「日本には創造論者以前にそもそもキリスト

10) 科学と疑似科学の境界は必ずしも明瞭ではない。この点の分かりやすい解説として、田崎晴明「科学と『ニセ科学』をめぐる風景」Science and "Fake Science" Hal Tasaki (gakushuin.ac.jp) を参照（これは『物理教育学会雑誌』54（3）、2006年9月に発表された論文に加筆したものである）。

教徒が少なく、幸いにも原理主義者が教育や政治や医療を常に脅かすような事態には至っていない」(19 頁)、「[無神論者にたいする] 創造論者の攻撃は遥かに巧妙だ」(22 頁) (下線、木村)。

岡本氏は創造の神 (および ID) だけでなく、進化を導く神 (有神論的進化論) も否定しているようである。さらにいえば、宗教全般を否定しているのかもしれない。少なくとも、この書物を通じて、宗教にたいする岡本氏の敬意は感じられない。

無神論者が宗教を論じる利点は、どの宗教をも中立的、客観的に観察できることといえよう。反面、問題もある。それは「体験知」の欠落である。宗教は、教理を知的に理解するだけでなく、体験する必要がある。体験してはじめて真に知り得るのが宗教だろう。この書物の背後に岡本氏のどのような体験知があるのか、あるいは一切関心がないのか、これはもちろん純粋に個人的な事柄だが、第三者にとって気になる点である。

(2) 私の立場

私の考えでは、進化論は重大な欠陥を免れず、信じるに足らない。端的に言えば進化は、よくできた作り話だと思う。元素からタンパク質、恐竜、猿人まで登場して壮大かつ細密、しかも面白い。それゆえ科学者、一般人を問わず人を引きつけてやまないが、確たる証拠は何もなく、すべては想像にすぎない。

創造も作り話にみえる。しかし私は、創造が真実—歴史的事実だと考える。それは、聖書信仰と関係するが、何よりも、創造論の方が合理的だからである。

岡本氏によると、新無神論者は、「何もないところから物質と反物質が生じて宇宙ができた」と主張し、「少なくとも創造主のような途方もない仮定を置く必要はない」という (197 頁)。私には、創造主の存在を認めることがどうして「途方もない」のか理解し難い。それは科学に反することでも何でも無い。むしろ、無から有が生じると考えるほうが—いかに高度な数学を援用したとしても—よほど「途方もない」のではなかろうか。

創造主は全能だから、その存在を認めれば、すべては自ずと納得できる。カエルのような下等動物から高等動物まで、動物の姿はどうしてきれいな左右対

称形なのか、人間の両手足はどうしてそれぞれ5本指なのか、どうして顔面に目が2つで、後ろに3つ目がないのか—生存競争上、その方が圧倒的に有利なはずなのに。こうした疑問にすべて容易に答えることができる。それは神がそのように造ったからである。「何事も神を持ち出せば解決できる」(111頁)。新無神論者は皮肉のつもりでこう言うが、創造論者にとっては真実かつ合理的である¹¹⁾。

先年物故されたノーベル賞物理学者、益川敏英氏は、同じくノーベル賞学者の山中伸弥氏との対談の中で、自分は無宗教だと明かしたうえで、神を引き合いに出して説明するのがいちばん手取り早い、だが科学の考え方はそういうものではないと述べた¹²⁾。これは科学者として、理論と実証を真摯に追求する氏の信念の表れと思う¹³⁾。

この信念は敬服に値するとはいえ、すべてを科学で説明することは「途方もない」知的チャレンジである。新無神論者はけっきょく、偶然に頼る。確率がかぎりなくゼロでも、地球年齢46億年という時間があれば何事も起こり得る。偶然の積み重ねがすべてを可能にすると信じるのである。これは、偶然を創造主に祭り上げる「偶然教」あるいは46億年を万能の魔法の杖とする新たな信仰ではないだろうか。

中立進化論で知られる進化学者、木村資生は、「生物進化がいかに大きく偶然に左右されたか……人間は宇宙における奇跡であり、非常な好運の連続によってはじめて生じ……銀河系の内で高度な知的生物は人類をおいて他にないという主張の方がはるかに理にかなっている……」と書いている¹⁴⁾。この表現

11) この考え方は、合理性による点で、よく知られたパスカルの賭けに通じるかもしれない：「神が存在するかどうかは論証できるものではなく、結局は賭けである、そして、もし賭けるなら存在する方に賭けるのが賢明である、なぜなら勝てば天国に行けるし、負けても失うものはない、反対に、存在しない方に賭けると、負けたら地獄、勝っても何も得られないからだ」(『パンセ』第233節)。

12) 山中伸弥・益川敏英『「大発見」の思考法—iPS細胞 vs. 素粒子』文春新書、2012年、184-85頁。

13) 同上、188頁。

14) 木村資生『生物進化を考える』岩波新書、1988年、282頁。

を借用すれば、非常な好運の連続は、偶然ではなく作為によるという主張の方がはるかに理にかなっている。比喩的にいえば、ルーレットを回して5回でも連続して同じ数に当たろうものなら、こっそり操作したに違いないと警察が飛んで来るだろう。

物質が自ら生命を作り出すこと、それが自然に複雑化して人間が生まれることがありえるのか、それが物理の基本法則にかなうのか、先入観を排して自分の頭で考えることが大切だと思う。私は平均的日本人である。キリスト信者の家庭に生まれ育ったのではない。ミッションスクールに通ったのでもない。20代までは進化論に何の疑いをもたなかった—進化論「盲信者」だった。しかしあることをきっかけに進化論に疑問をいだき、関連する本を読んで考えた結果、創造論者に転向した。それゆえ私は、創造論盲信者ではない¹⁵⁾。

岡本氏も認めるように、進化論は検証（反証）可能でなく、再現、観察もできない（104、243頁）。これは、科学の要件を満たしていないことを意味する。進化論は、創造科学と同様、疑似科学にすぎないのである。P. ジョンソン（法律家、カリフォルニア大学教授）はダーウィンを批判する本（*Darwin*

15) 内村鑑三をはじめ、明治期のキリスト教指導者はいずれも、進化論を正しいと認めていた（内村の考えの詳細は、武富保『内村鑑三と進化論 付 内村鑑三の進化論三部作』キリスト教図書出版社、2004年を参照）。

その主たる理由は、当時の知識人が欧米の近代科学の成果に圧倒され、批判的精神をもてなかったことだろう。しばしば指摘されるように、日本では伝統的に自然崇拜の念がつよく、動物と人間の境目が曖昧だったことも影響したかもしれない。19世紀は、日本のみならず、欧米においてすら、生命は自然に発生する（たとえば、ゴミの山から虫が自然に生まれ、這い出して来る）と信じられていた時代だったから、進化論は短期間のうちに、さしたる疑いなしに日本社会に受容されたのである。ただし、20世紀になって皇国史観の勢いが増すと、進化論—人獣同祖論は、天皇＝現人神思想に背馳するとして、一部で危険視されるようになった（溝口元「日本におけるダーウィンの受容と影響」『学術の動向』2010年3月、48-57頁）。

内村の思考は、よくいえば柔軟、悪くいえば一貫性を欠く。たとえば内村は日清戦争時、この戦争に賛成して日本の勝利に歓喜したが、日露戦争には一転して反対、非戦論を主張した。それでは、進化論についてはどうだろうか。現代科学は細胞からDNAの構造まで詳細に究明し、人体の複雑性、精密性を万人に示した。これは全くの想像にすぎないが、もし内村が今日在世し、こうした事実を知ったならば驚嘆し、進化を否定、創造論に転じたかもしれない。

on Trial、1991) を書き、その中で、「進化論は科学的仮説ではなく、人間や世界は偶然の産物であり、そこに一切の意味や目的はないと決めつける反宗教的なイデオロギーなのである」と主張した (112 頁)。この主張は、私からみて至極真っ当である。

新無神論者は知的に優秀であるから、創造論者の主張はもちろん先刻承知で、つねに反論を用意してきた。たとえば、四騎士のひとり、デネット (科学哲学者、タフツ大学教授) によれば、進化は偶然ではなく、生存競争により必ず起動する自動的なプロセス、アルゴリズムである (174 頁)¹⁶⁾。ドーキンズなら、そもそもルーレットのような比喩を持ち出すのが間違いだと言うだろう¹⁷⁾。

そして、議論はすれ違い、不毛に終わる。双方とも、どのような「証拠」を出されても譲ることはない。それは、創造論と進化論の論争が本質的に、科学論争ではなく、有神論と無神論 (あるいは進化教、科学教、偶然教、億年万能教、名称は何でもよい) の宗教論争だからである。

(3) 新無神論者の人物像

1992 年、*The Facts of Life: Shattering the Myth of Darwinism* と題する書物が刊行された。著者は科学ジャーナリスト、ミルトン (R. Milton) である。これは 90 年代初頭のもうひとつの有力なダーウィニズム批判の本で、刊行後、激しい議論を巻き起こした。翌年にはペーパーバック本、1995 年には邦訳が出た¹⁸⁾。

16) このアルゴリズムがどうして存在するのか、説明はない。これは一種の目的論である。そうなるようになっていたから、そうなったのだ、という議論と同様で、説明といえない。

かなり以前、(日本の) 高校の生物の教科書は、「定向進化説」を教えていた：「サイの角は、伸びると次第に内側に (サイ自身に向かって) 湾曲する。これでは攻撃・防御武器の役割を果たさず、生存競争上、かえって不利になる。にもかかわらず内側に伸び続けるのは、その方向に向かうようになっていたからである。」

これはギリシア形而上学であって、近代科学ではない。

17) ドーキンズは、自著であえてパスカルの賭けを取り上げ、反論を展開している (垂水雄二訳『神は妄想である—宗教との決別』早川書房、2006 年、148 - 55 頁)。

18) 竹生淑子訳『進化論に疑問あり—ダーウィニズム神話を検証』心交社。

ミルトンはこの書物で次のように主張する。

- ・地質学、放射性元素崩壊法（炭素法、ウラン・鉛法、カリウム・アルゴン法）による地球年齢 46 億年説は信頼できない。放射性炭素法をはじめ、磁場崩壊や海中ニッケル、大気中のヘリウムの研究はむしろ地球の年齢がはるかに若い—1 万年～数万年—ことを示唆する。
- ・多様な化石の存在は進化を示すとはいえない。たとえば、始祖鳥は恐竜の子孫ではない。
- ・進化の実例はひとつとして提示されたことがない。19 世紀からヨーロッパの工業都市で、蛾の黒色変異が観察された。これは「工業暗化」(industrial melanism) と呼ばれ、自然選択による進化の一例とされる。しかしこの現象自体に疑いがある上、それは変種—同一種内の変異—であり、進化—異種への変異—とは何ら関係がない。
- ・適者生存も自然選択も、進化のメカニズムを説明するものではない。生き延びる動物もあれば死滅する動物もあることを言い換えたにすぎない。
- ・突然変異によって生存に有利な優れた形質が現れることはない。
- ・虫垂などは不用な痕跡器官とされるが、じつは人体に有益な役割を果たす。
- ・中間化石（たとえば、首の短いキリン、鼻の短いゾウの化石）は一切見つかっていない。
- ・アウストラロピテクスやジンジャントロプスは人類の祖先ではなく、類人猿である。ピテカントロプス（ジャワ原人）やホモ・ハビルス、ネアンデルタール人は現代人と同じヒトである。

ミルトンは各専門科学者の研究を丁寧にフォローし、冷静に論をすすめている。自らは創造論者ではないと述べ、あくまで科学的な仮説の検証者という立場を貫く。

ドーキンズは同書の初版刊行後すぐ、*New Statesman and Society* に書評を寄せた¹⁹⁾。これは、非礼な言葉と嘲笑に満ちている。まず出版社を罵って、古

19) “Fossil fool - *The Facts of Life: Shattering the Myth of Darwinism*,” *New Statesman and Society*, August 28, 1992, pp. 33-34.

代ローマ人はいなかったと主張するのと同じぐらい愚かな (silly) こんな本をなぜ出版したのだ、ほんの少しの常識と生物学の基礎知識をもった編集者を雇うだけで判別できただろう、と書く。罵倒は続き、書評全体の半分近くになる。

後半はミルトンへの攻撃である：アマチュア、単なるエンジニア、地球が若いと考える精神病患者の一人、馬鹿 (stupid) 等々。最後は次の言葉で終わる。「戯言で暇をつぶそうと思うなら、エホバの証人のトラクトを手に取るほうがましだろう、楽しく読めるし、魅力的な写真もあるから」。

じつはドーキンズも、動物行動学以外の分野ではアマチュアである。進化論は総合的学問で、その探求には物理学、化学、生物学、人類学、地質学、天文学など幅広い知識を必要とする。一身でこれらすべての学問をマスターするのは、たとえばダヴィンチのような天才といえども不可能である。

ミルトンはペーパーバック版の序文でドーキンズの書評（および科学雑誌 *Nature* 論説委員の拒否反応）に触れ、「ダーウィニズムというイデオロギーの要塞を死守しようとするあまり、本書を猛批判していた人々は感情的になり」、自分（ミルトン）の見解を曲解していると反論した（邦訳、6 頁）。しかしそこにドーキンズにたいする人格攻撃はない。ミルトンはむしろ、ダーウィニズムに批判的な論文が *Nature* のような権威ある雑誌に掲載されることは決してないと述べ、学界の現状を憂えている。

『創造論者 vs. 無神論者』の中で岡本氏は、新無神論者について次のように書いている。「新無神論者には多くの批判が寄せられる。白人中心主義、男性中心主義、英米中心主義、キリスト教中心主義、ヘイトクライムを煽っている、言葉が汚い、議論が雑、無礼非礼、配慮に欠ける、宗教の知識がないなど、的を射たものから罵倒まで様々である」（230 頁）。

さらに、「ドーキンズは、進化論を信じない人は『無知か、馬鹿か、狂っている』とまで言い放つ」（112 頁）、「ゲールドは、それ〔世界を創った神によって（人間存在の）根源的な目的や意味が与えられているという信仰〕を『馬鹿げていて、傲慢で、まったく支持されない』と、まるでドーキンズのような口調で言下に否定する」（245 頁）。

ドーキンズら新無神論者はなぜこのように他人に厳しく当り、罵詈雑言を浴びせるのか。それはおそらく、自らの知性に高いプライドをもち、人間を超える絶対者への畏れを欠いているからだろう。

ドーキンズは聖書に精通し、若い世代があまりに聖書を知らず、名言や箴言を理解できないと嘆いているという（250 頁）。そうならばドーキンズは当然、「悪い言葉を口に出してはいけない」、「知識は人を高ぶらせ、愛は徳を建てる」という聖書の言葉を知っているはずだ（エペソ書 4：29、コリント前書 8：1）。論語読みの論語知らずではないだろうか。

前出のヒッチنزは信仰を軽蔑し、祈りを拒否して最期を迎えた。私には、それが幸せな死であったとは思えない。死んだらすべてが無に帰すと信じていたのだから。「死後の虚無が真理である以上、仕方ないではないか、勇気をもって怖れに克て」という声が聞えて来そうだが、どうしてそこまでつよく、それが真理と確信できるのか。その根拠は何なのだろう。

IV. 学校教育

(1) 進化論教育—知る権利

米国の創造・進化論争は、学校教育をめぐる激しく行われた。日本の状況はこれとは大きく異なる。進化論を否定する声が皆無なので、論争にならない。進化論者はもちろんこれを歓迎する。木村資生は述べる：「日本では、生物進化に関する限りこの『創造論の』ような誤った思想に社会が毒される心配がないのは幸いである。」²⁰⁾

創造論の立場からは、「社会が毒される」とまで言われるのは心外だが、学校で進化論を教えることに異議はない。世界の科学者の間で進化論が主流なのは紛れもない事実だからである。しかし一般国民の認識に目を転じると、様相は異なる。

少し古いが、2005 年の調査によると、進化論を正しいと考える一般成人

20) 前掲、木村資生、5 頁。

(public acceptance of evolutionism) の割合は、フランス、デンマーク、スウェーデン、アイスランドでは 80% 超、日本 78% だったのにたいし、スイス 60%、米国 40% で、最低はトルコ 25% だった²¹⁾。その後の調査では、カザフスタン 28%、インドネシア 16%、パキスタン 14%、マレーシア 11%、エジプト 8% で、イスラム圏では非常に低い²²⁾。

このように、進化論を信じる人々は先進国では多数派だが、イスラム圏または低開発国では少数派である。進化論者は、だからこそ少数派の国々で進化論教育をすすめ、国民を啓蒙しなければならないのだ、と主張するだろう。だが、それは単に国民の教育程度 (scientific literacy) の低さだけに起因するのだろうか。「先祖をたどるとトカゲになり、さらにイワシになる」と聞いて、「そんなことがあるはずはない」と考える「健全な」感覚があるのではなからうか。

知的な人が正しく、知識の乏しい人が間違っているとはかぎらない。頭脳明晰な者が誤った理論に嵌るとしばしばそれを際限なく深め、最後にはまったく見当違いの結論を引き出す。マルクシズム理論家はその好例である。

いずれにせよ、現時点で世界全体では進化論信奉者は少数派である。日本の学校ではこのことに触れない。進化論を、あたかも万人が認める絶対的真理であるかのごとくに扱う²³⁾。

くわえて、テレビとりわけ NHK は、進化を解説する、あるいは進化を前提とする番組 (ドキュメンタリーやアニメ) を繰り返し放送する。子どもたちは

21) Public acceptance of evolutionism, <https://evolutionmatters.eseb.info/img/pdf/chapter1.pdf>. 原典は *Science* 掲載の論文である。日本の 78% という数値は意外に低いようにみえるかもしれない。残りの 22% の多くはおそらく、「分からない」、「関心がない」、「どちらでもいい」という答だろう。

22) 同上。

23) これは日本の大きな特徴である。文科省の学習指導要領によれば、進化論は中学 3 年生の教育内容に含まれる。指導目標は次の通りである：「現存の生物及び化石の比較などを通して、現存の多様な生物は過去の生物が長い時間の経過の中で変化して生じてきたものであることを〔理解させ〕、……進化の証拠とされる事柄や進化の具体例について扱うこと……遺伝子に変化が起きて形質が変化することがあることにも触れる……陸上生活をする生物は水中生活をするものから進化したことにも気付かせる」(文科省『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 理科編』2011 年、108-09 頁)。

こうして進化論に染まる。洗脳と言ってもよいかもしれない。

私は、学校は次のことを子どもに伝えるべきであると思う。

第一に、生命の発生、より高等な生物種への変異をじっさいに見た者は誰もいない。第二に、進化の説明には多くの疑問が出されており、一流といわれる科学者の中に進化論を間違いとする意見がある。第三に、世界では、進化論を信じない人々の方が多数派である。

これらは特定の立場からの意見表明ないし主張ではなく、客観的事実である。前述の益川氏、山中氏もそれぞれ、(猿から人間が進化したという) 進化論は「何の根拠もない」、「証明されていない」と述べている²⁴⁾。両氏がこれほどはっきりと言うのはおそらく、進化論(ダーウィニズム)の論証精度が、物理学や医学・生理学ではありえないほど低いからであろう²⁵⁾。両氏は進化論を否定しているわけではないが、現段階では到底、論証されているとはいえないと考えているのである。ノーベル賞受賞学者は学界の最高権威とされ、とくに日本では、世間はその発言を重くみる。両氏の懐疑に目をつぶってよいとは思えない。

子どもには、上述の重要な事実を「知る権利」があるだろう。そうならば、教師はこれを語らなければならない。さらに進んで、より上級の授業では、進化論の非科学性—科学の通常の要件を満たさない、したがって科学的仮説ではない—もきちんと教えるべきと考える。

(2) 道徳教育

24) 前掲、山中・益川、187頁。

25) ダーウィンの適者生存の説明には以下のようなおかしなもの—いわば小学生レベルの粗雑な推論—がある。たとえば、キリンは首が長いほうが高い木の葉を食べられるので生存に有利である、だから長くなったのだという説明は広く知られる。しかし首が長いと、水を飲むのに決定的に不利である。動物園では、飼育員がハシゴで上り水桶を口元まで持って来てくれる。だが、サバンナではそうはいかない。地に溜まった水を飲まねばならない。キリンは両前足を少しずつ横に開き、大きく広げた末にようやく地面まで首を下ろして水を飲む。これは多くの時間を要する。その間にハイエナがさっさと飲んで行ってしまうだろう。

進化論を絶対視すれば、子どもたちは、人間はけっきょく物質でしかないと思ひ込み、それ以上の考えをもつことができない。とくに、生存競争、弱者淘汰というダーウィニズムが脳裡に浸透する。ここからどのような道德教育、情操教育が行われ得るだろうか。教育現場は、浅薄な功利主義哲学—快楽主義・便利主義—に支配されないだろうか。生命倫理の確たる基礎を示すことができるだろうか。

文科省の道德学習指導要領は、公德心、自主・自律性など、涵養すべき多くの徳目を掲げる²⁶⁾。そのひとつが「感動・畏敬の念」である。そこには「人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める」と書かれている。ここでいう人間の力を超えたものとは一体何だろうか。

これを説明しようとするれば、何らかの宗教的概念の助けを必要としようが、公立学校で掘り下げた内容を語ることは許されない。特定の宗教に依ることができない公立学校の教育には、この点で大きな限界がある²⁷⁾。

思春期の大きな悩みは、生きる目的がはっきりとは分からないことである。文科省の道德学習指導要領は、どのように生きるのか—礼節、勇氣、向上心をもって、家族・郷土・国を愛して等々—については多言するが、何のために生きるのかは語らない²⁸⁾。

すでにみたように『創造論者 vs. 無神論者』の終章は、現代社会での宗教にたいする科学の絶対的優位性を指摘している。「縄張り」の大きさからいえば明らかに、自然部門で顕著なように宗教のそれは縮小した。しかし、大きさは

26) 「付録5 特別の教科 道德」前掲、文科省、177-78 頁。

27) 日本の刑務所・拘置所には、公的な教誨師（チャプレン）制度がある。これは宗教者が、受刑者にたいして徳性を養う教育や精神的ケアを施す制度である。宗教は仏教、神道、キリスト教、天理教など様々で（カルトは除く）、受刑者が選択できる。これにより、受刑者は宗教行為への参加を許され、信教の自由を保証される。一方、職員（公務員）は宗教行為を行なえないので、教誨師を務めるのは民間ボランティアである。

28) 岡本氏は、創造論の説明のさい、米国の著名な牧師、リック・ウォレン（Rick Warren）の世界的ベストセラー、『人生を導く五つの目的』（原題、*The purpose driven life: what on earth am I here for*）を引用している（11 頁）。表題が示すように、これはキリスト教による人生の目的を教える本である。岡本氏は否定的なようだが、私は、多数の読者を獲得するにふさわしい名著だと思う。

重要性和イコールではない。むしろ、科学が進歩すればするほど、それをいかにコントロールするかがいっそう重要となる。岡本氏は、科学の縄張りが今後さらに拡大し、ついには無神論が完全勝利する—宗教を衰滅させる—ことを望んでいるように見える。氏はマルクス主義者ではないだろうが、この予想ないし期待はマルクスと同じである。

宗教（もちろんパロディやカルトは別である）は、物質世界の背後にある非物質世界を探求し、そこから、道徳の原理を含めた人間の生にかんする洞察を導く²⁹⁾。縄張りは小さくとも、宗教はこの点で、人間にとって決定的に重要である。教育現場に限らず、メディア等を通じて、子どもたちに物質世界がすべてではない（かも知れない）と気づかせ、科学絶対主義、功利主義の「迷妄」から解き放つ—このことが今日、とくに日本では緊要なのではあるまいか。

V. むすび

聖書には、最初の人間アダムは土の塵から造られたと書いてある。しかしそれがどのようにかは書いてない。映画「天地創造」が描くように霧の中にフワ—と現れたのか、あるいは土中から飛び出して来たのか。いずれにせよ、歴史上1回かぎりのことだから、検証しようがない。キリストの処女降誕、死後復活と同じく、信じるか、信じないかの事柄である³⁰⁾。

29) 日本では伝統的に、儒教が道徳の基本原則となってきた。儒教が宗教なのかそれとも世俗哲学なのか、諸家の意見は分かれる。他方、プラトンなど古代ギリシアの哲学者は、非物質世界に真理や正義の根源を見出す点で宗教的である。

近代ではニーチェが、キリスト教は弱者の泣き言、嫉妬心の発露にすぎないとして、キリスト教に厳しい批判を加えた。それは興味深い内容を含むとはいえ、キリスト教の教理・倫理を覆すものではない。付言すると、キリスト教会ではニーチェはいわば裏切り者で、著作は禁書扱いだが、ニーチェはじつは、人間の生を真剣に考えた哲学者である（主著『ツァラストラはかく語りき』、『善悪の彼岸』はそれをよく示している）。宗教を否定、嘲笑するだけで、代替するもの、より高次のものを何ら追求、提示しない（できない）パロディ宗教家や新無神論者と同列に扱うことはできない。

30) キリストの復活とアダム創造との大きな違いは、前者には多くの目撃者がいた（聖書、コリント前書 15:6 によれば、復活したキリストに出会った者は 500 人以上に上る）のにたいし、後者にはそれがいない—他にまだ誰もいなかったのだから当たり前だが—ことである。

人間がいかに誕生したかは人類最大のミステリーであり、解明される日—論争に決着がつく日は決して来ない、と私は考える。かりに地球年齢の正確な測定法が確立し、結果が1万年であったとすれば、進化論は崩壊する。しかしいかに科学が発達しても、「水は酸素と水素から成る」という命題と同程度の確かさで、地球の年齢を定め得るとは思えない。繰り返し観察できない、あるいは実験で立証できない以上、地球の年齢測定には不確実性が残るだろう。そうであれば進化論者は、測定結果に異議を唱え、自らの「信仰」を守ることができる。

他方、創造論者にとっての難問は、地球（宇宙）の年齢が1万年だとすると、なぜ遠くの星が見えるのかという疑問である。というのは、星の光の分析から、多くの星が地球から何万、何億光年も離れていると判明するからである。そうならば、誕生してわずか1万年の地球に、その光は届かないはずである。

創造科学者はこの疑問への答えをいくつか用意するが、それらは素朴なアイディアに留まっているようである³¹⁾。だが、創造科学者は屈するには及ばない。この世界に、説明困難な現象はいくらでも存在する。「それは、今は分からないが、後世の科学者が、新たな理論を編み出して解明するだろう。科学はこうして発達してきたのだ。」—この台詞は、難問に直面する科学者の切り札である。それは、創造論、進化論、どちらの側にも共通する（宇宙論についていえば、主流の科学者の間でも諸説紛々、入り乱れており、確実なことはごくわずかしかない）。

偉大な哲学者が論じるように、人間の理性・知性には限界がある。いや、限界だらけと言ってよい。そもそも科学は法則を発見するが、なぜその法則が存在するのかを説明しない³²⁾。それは科学の役割ではない。私たちにとってもっとも大切なのは、無知、非力を認めて謙虚になることではないだろうか；こ

31) J. ハートネット、安井亨訳『光年の謎と新宇宙論—若い宇宙で、なぜ何億光年も彼方の星の光が見えているのか？』パイブル アンド クリエーション、2013年。

32) 数学も同様である。数学者は、オイラーの公式（等式）のような信じがたいほど美しい式を導くが、この世界は何ゆえ、かくも美しい式が成立するようになっているのかは説明しない。

の点で、聖書、ヨブ記、第 38－39 章はとくに科学者が心に刻むべき言葉を含んでいると思う。知的好奇心は大いに尊重されなければならない。科学の進歩に欠かせないからである。しかしすべてを知りたいという欲望は、神のようになりたい、という欲望に通じる。それは、バベルの塔を建てて天まで上ろうとした古の人間の姿を想起させる³³⁾。

最後に、『創造論者 vs. 無神論者』は、著者独自のメッセージ発信を意図したものではないが、一読に値する。細部にわたってよく調査され、学ぶところが多い。文章は分かりやすく、かつ読者を飽きさせない。この書物に出会ったことを感謝したい。これが偶然ではなく、神の導きによるものと信じ、才能に恵まれた岡本氏のこれからの宗教論に期待しながら筆を置く。

33) バベルの塔建設は聖書中のとりわけ有名な事件である（創世記、第 11 章、バベルはヘブライ語で「混乱」の意）。多言語がここから始まった。進化論者の議論には通常、言語の成立について説明がない。言語学者の間ではこの問題はまったく未解明で、有力な仮説すらない。

N. チョムスキーは、簡単にいえば、あるとき突然に天才的人間が言語を話し出したという説（不連続性理論）を唱えている。これはいかにも奇説と映るが、特定の人間によって言語が人工的に作られ、かつそれが普及し得ることは、エスペラント語の例が示している。現代ヘブライ語も同様で、ひとりのユダヤ人、ベン・イエフダーが、異常な努力により古代ヘブライ語から復元・作成したものである。イエフダーは、自分の息子にこの言葉を厳しく教え込んで、最初の母語話者とした。それが現在のような国民的言語に成長したのである（R. セントジョン・島野信宏『ヘブライ語の父 ベン・イエフダー』ミルトス、2000 年参照）。

聖書は、アダムがエデンの園であらゆる鳥獣に名前をつけたと記している（創世記、第 2 章）。チョムスキーの説に照らすと、このエピソードは、言語がいかにか始まったかを示唆するといえるかもしれない。

サルには言語能力がない。知能だけでなく発語能力が低い—声帯がほとんど発達していない—からである。人間の場合、気管と食道の入口が喉で重なり、そこに声帯が発達している。この声帯と肺呼吸により、口から、様々な音声や美しい歌声を出すことができる。これもまた偶然なのだろうか。

言語には簡単化の原則があるという。たしかに、現代英語は中世英語より簡単になっている。日本語も、昔の敬語ははるかに複雑だったし、発音には「ず」と「づ」や「じ」と「ぢ」の区別があった。印欧語の祖語、古代サンスクリット語（梵語）は現代印欧語に比して、非常に複雑な文法（名詞の性・数・格変化、時制、態、接尾辞）をもっていた。このように時代とともに簡単化するのであれば、それは進化と正反対である。